

特集 ■ 法然上人八百御忌、浄蓮寺開創八百年

念仏すけささぬ人(六)

— 角張成阿のこと —

東北大学名誉教授 高橋 富雄

成阿クオ・ヴァデイス

— 成阿いずこに行き給う物語 —

わたくしは『松柏』編集者のもとこの「寺報」読者だったら、きっとこんなタツチの開山物語もお許しただけだろうと思つて、敢てこんな題名の説き語りを構想しました。

『クオ・ヴァデイス』知る人ぞ知る世界の名作の題名です。はじめの方は副題からそれとなくご推察しておいて下さい。わたくしは、法然上人常随近侍の角張成阿が、何故信州下りし、浄蓮寺開山上人の歴史を始めることになるか、これまで謎に包まれたままだった秘史開かずの門の謎の扉をノックしている著名な成阿物語があるにもかかわらず、軽く読み流されて、まともな扱いを受けていないのを残念に思い、これへの本格アプローチを提唱するのです。

『正源明義抄』第八「成阿父の蛇(くちなわ)の事」物語です。上人四国配流中、讃岐国清福寺でのこと。とある一日、上人成阿を召して仰せて曰く「近くの曼陀羅寺の東にあ

る大石の下で、蟬の啼き声のような音がする。聞こえるか」

「夏にもなりましたから」と、成阿。上人。「いや、そうでない。あれこそ成阿、汝が父の声なるぞ。急ぎ往いて、岩を割り裂いて見よ」。

成阿には思いあたる節があった。大槌・鶴嘴諸道具を用意し、急行、岩を掘り割つて見ると、中のくぼみの水たまりに、三尺ほどの赤竜(赤かがち)がとぐろを巻いていた。噂を聞いてかけつけた人たちは黒山の人がかりだった。

心中の動揺をじっと押し殺して成阿「まこと父七郎政氏にておはしまさば、この衣の袖へうつり給へ」。そう言つて衣の袖を差し出すと、赤竜はそろりと袖にのり移った。正しく蛇身の亡父だったのである。

座下の岩盤上には刻銘があった。我是観音寺勸行令落止罪業所感果石掘為蛇身(我は是れ観音寺勸行落としむる罪業に感果せられ石を掘り蛇身と為る)

成阿は「それからの父」の一切を了解して、昔をこう懺悔した。「信

州角張庄の名刹観音寺の兔田(免税田)・在家を地頭の父政氏は悉く没収、角張党の部下に分給した。その罪の業報として蛇身の畜生道に墮ちたこと疑いない」

上人「信州の所行の罪科が、遠い讃岐国での所課とは如何なるわけか」。成阿「別当阿闍梨良秀はもと当国禅通寺(善通寺)の僧で、故あつて信州観音寺別当になり、寺領没収の憂き目にあい、本国に戻つたと聞く。その恨み骨髄の仏罰として、この蛇身応報の所課になつたに相違ない」。

この成阿生父政氏変成蛇身物語には、若干の後日譚が付加されています。全文、以下の通りです。さて、少蛇、七月十五日の念仏の最中、念仏聴聞すとおぼへて、上人にむかひまいらせて、うちのびて死に畢んぬ。上人のおほせには、少蛇往生したりと仰せける。紫雲たなびきたりければ、人々不思議のおもひをなしけり。

おわかりのように、この物語は、形の上では「成阿亡父政氏変成蛇身物語」と、その「蛇身亡父政氏往生物語」とより成る二部構成の体裁をとっているのですが、実質は前者の「政氏変成蛇身物語」が本篇で、後者の「蛇身亡父政氏往生物語」は、単なる「付録篇」であつて、物語の体をなしておりません。何故このような

ことになつたかと言いますと、この物語が全篇、法然上人神通法力の「秘伝遠流記」なる談義のジャンルとして伝承されていたものからの転載であるために、変成蛇身の神変物語を本篇とし、念仏往生のような純正法力物語は全くの付録として補作されるにとどまつたためです。

本来は、本篇の「政氏変成蛇身物語」は序篇、「蛇身亡父政氏往生物語」は「政氏変成蛇身それから物語」として、こちらこそが本篇となつておるべきものでした。そして「善知識法然上人廻向往生」よりも「孝子成阿孝養廻向往生物語」として有終の美を済しておるべきところだったので、ここには成阿の出番は全くなく、従つて「蛇身亡父政氏往生物語」も、可憐、竜頭蛇尾物語に終わつてしまつてゐるのです。

一体、成阿はどうなつたのでしょうか。どうしたのでしょうか。こうして物語は必然的に「成阿いずこに行き給う」(成阿クオ・ヴァデイス)を主題化せねばならないことになるのです。「クオ・ヴァデイス」。ポーランドの作家シェンキヴィッチが一八九六年、聖書の「主よ、いずこに行き給う」(ドミニネ・クオ・ヴァデイス)の聖句を借りての不朽の名作の名です。今それを又借りして、成阿念仏廻向物語の行方をたどるのです。